

# 紫芳会だより

## 輝く先輩たち

No. 59  
2017. 9.1 発行

### ブックデザイナー 鈴木一誌

(高校21期)



デザイン学校で教える(MeMeデザイン学校、2016年)

中国・北京で作品を展示(2015年)



鈴木一誌(すずき・ひとし) 1950年東京都立川市生まれ。東京学芸大学、東京造形大学ともに中退。83年に独立、学生時代に見た鈴木清順監督作品『東京流れ者』に影響を受け、時間のドラマをブックデザインで表現できないかと模索して、現在にいたる。会報『紫芳』では、50号からブックデザインを担当している。

ブックデザインのしごとに、『昭和 二万日の全記録』『英文日本大事典』『クロニク世界全史』『クロニク 戦国全史』『人物20世紀』『シリーズ20世紀の記憶』『知恵蔵』『朝日年鑑』『Japan Almanac』『大辞泉』『茶道大事典』『平安時代史事典』『生体虚論』『想像力博物館』『新字源』『鈴木清順全映画』『昭和の劇 映画脚本家笠原和夫』など。

単著に『画面の誕生』『ページと力』『重力のデザイン』、編著に『三里塚の夏』を観る。共編著に『知恵蔵裁判全記録』『映画の呼吸 澤井信一郎の監督作法』『全貌フレデリック・ワイズマン』『1969 新宿西口地下広場』『デザインの種』『絶対平面都市』。1981年に映画批評で第一回ダゲレオ出版評論賞。98年に講談社出版文化賞ブックデザイン賞。

■ブックデザインは、本をデザインする仕事ですが、「装丁(装幀、装訂なども)」よりも広い概念です。もともとは、「書物をとじて表紙をつけること」であった装丁が、書物のカバーや表紙などの外装を整える意であるのに対し、ブックデザインは、本の中身までを考えようとしています。

■本の中身である本文は、どのような要素から成り立っているでしょうか。文字があります。ということは、どのような書体を使い、それをどんな大きさに配置するのかを決めなくてはなりません。タテ組でしょうか、ヨコ組でしょうか。1行の文字数は何字が読みやすいでしょうか。行と行のあいだの間隔をどうしましょう。タイトルの意匠も考えます。写真や図版のレイアウトも仕事のうちです。本の中身は、紙の上に印刷されています。どのような紙にどう印刷するのかを計画するのも、ブックデザインです。写真家やイラストレーターを誰にしようかと考えるのも、役割のひとつ。読書という行為を通じて、読者が本と出会うとき、ページのたたずまいの心地よさ、読みやすさは大切で、本を、外装から内容まで一体のものとして捉えようというのがブックデザインです。読者の眼差をカバーから本文へと導く、つまりは書物を立体物として捉える、と言えます。

■画家の余技としておこなわれがちだった装丁を、ブックデザインという独立した職業に育てるまでには先人たちの努力がありました。東京オリンピック(1964年)のころですから、およそ半世紀の歴史しかない新しい職業ですが、情報の変化につれてブックデザインも大きく変わっていきます。「DTP」という言葉をお聞きになったことはありますか。デスクトップ・パブリッシングの略称で、自分の机の上で印刷データをつくれるということです。1990年代、パーソナル・コンピュータの登場によって可能になりました。それまでは手で行っていた作業が、いまでは、すっかりパソコンを操作しながらモニターと対面する毎日です。この「紫芳会だより」も、わたしがDTPでつくりました。最近では、電子書籍にも対応しなければなりません。電子書籍ではどんな誌面が読みやすいのか、まだまだ試行錯誤の最中です。

■子どものころから図案や漫画が好きでした。中学で、写真を撮り現像・焼き付けするのを覚え、撮りためた写真をアルバムに貼りながら、多くの人に見てもらうには「レイアウト」のようなものが必要な、そんなふうにはぼんやりと考えていました。

■立川高校では、剣道部に属しながら、美術方面への進路を淡く思い描いていましたが、美術の何をやるのが定まりません。絵画なのか彫刻なのか、工芸なのか。絵画にしてもいろいろとあります。高校三年生の晩秋に大病をし、受験勉強から落ちこぼれ、追いつめられた気分で、とにかく美術へ進もうと決断しました。

■ともに中退をしましたが、ふたつめの大学で、デザイン、それもブックデザインだと目標を絞りました。師と仰ぐべき高名なブックデザイナーである杉浦康平さんに出会う幸運にめぐまれたからです。大学のあと、杉浦さんのもとでアシスタントを12年間つとめました。修業期間ですね。1985年に独立して、以来ずっとフリーでやってきました。

■手がけるジャンルもさまざまで、文芸書からドキュメンタリー、辞書もあれば漫画や写真集など、どんな依頼が舞いこむのか、楽しみな日々です。本には、まったく同じという仕事はありません。一点一点が個性的で違ってきます。退屈する暇がありません。ブックデザイナーが、日ごろ何を思い、どのような目を周囲に投げかけているのか、それを記したエッセイ集『ブックデザイナー鈴木一誌の生活と意見』(誠文堂新光社)を7月に刊行しました。機会がありましたら、手に取ってみてください。

